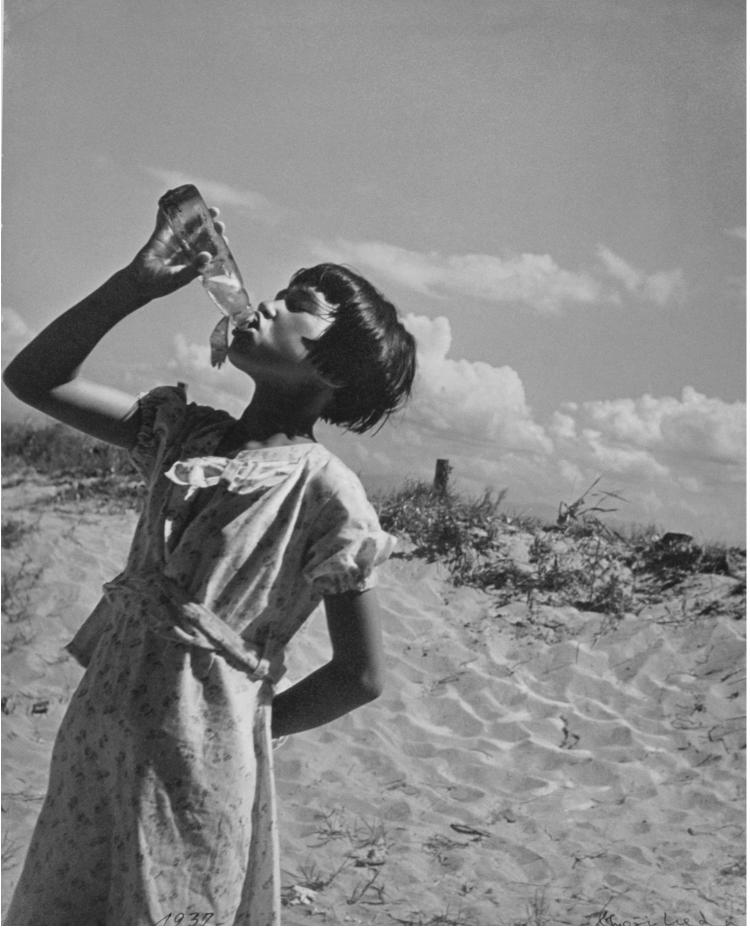


Shoji Ueda



er - Blazing Heat, 19

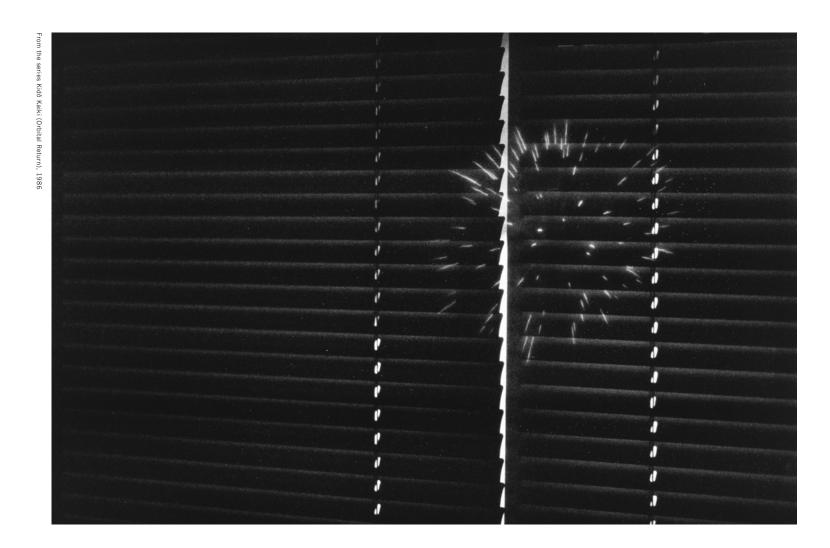








From the series Warabe Goyomi (Children Calendar), 1959-70



Critique

"世界のウエダ"に対する新鮮な読み直し

マーク・フューステル=文 松山直希=訳 Text: Marc Feustel Translation: Naoki Matsuyama

ンとフランスを巡回した。近年

画した大規模な回顧展がスペインヌのエリゼ写真美術館が企

知名度が薄れてきている感があ

スモールプレスであるフ

行き当たっている。『カメラ』誌的な要素のひとつとなるものに

作品を展示し、死後にはローザ

そしてケルンのフォトキナでも

写真フェスティバルでは二度、真家の一人だった。アルル国際

ロッパで最も愛される日本人写

田正治は何年もの間ヨ

ランスのChose Communeが発表する新しい作品集は、植田を新しいオーディエンスと引き合わせるだけでなく、作品に対して新鮮な観点を与えることになるだろう。

に この遠隔の地に深い愛着を持ち この遠隔の地に深い愛着を持ち に かが、生涯を通して生活と活動 で学んだのち故郷に戻り、写真 で学んだのち故郷に戻り、写真 で学んだのち故郷に戻り、写真 なタジオを開業した。よりプラ イベートな作品は、このスタジ オの運営と並行するかたちで制

田も過去に画家になることを夢響が強く見られる――実際、植画主義から写真表現の新たな前面主義のがが強く、絵画主義の影響が強く見られる――実際、植

マークになった。

是ていたことが知られている。し見ていたことが知られている。しかし『The Studio』誌の特別号「モがンフォトグラフィー」(1931年)を通して、マン・レイやアンドレ・ケルテスなどのヨーロッパの前衛作家の作品に出会ってからは、彼らの実験精神に惹かれるようになった。し

砂丘はその後の活動を通して使 ミニマルでありながら人目を引 らえていた彼は、「砂丘は巨大な 遊び場のひとつとなっていく。 われ続け、彼の写真のトレード 賞者の遠近感を翻らせるような を用いて、空間を巧みに操り鑑 友人や家族など)やシンプルな 砂丘をニュートラルな背景とし ても写真になる」と話している。 ホリゾントだ。どこをどう撮っ スタジオのようなものとしてと く構図の作品を制作していった もの(傘、ボーラーハットなど) 実際、砂丘を個人的な活動の 自分の周りの人(しばしば

様性に満ちたプロジェクトの数々観点から眺めると、はるかに多象的だが、その活動をより広い

収めた「白い風」というシリー ほぼ変化することのなかった日 比類なく創造的な作家としての 験することに常に積極性を持ち 呼ばれる) 白黒のスタイルを確 9年代に制作された、 写体がポーズを撮っていない、 とは違って、 要素となっており、砂丘の写真 影された白黒写真が主要な構成 すべて放棄するという大胆な決 の作品集『Shōji Ueda』は、 ことによって、この作品集は実 つもの写真形式を組み合わせる ズが本を締めくくっている。 おり、穏やかな色合いの風景を の中でリズムを作る役割をして ントのスティルライフ数枚が本 ている。多重露光のカラープリ 意外なカラーの作品も収められ 立し称賛を受けた作家からは、 断片である。さらに1980~ 本の辺境地における日常生活の 断をしている。数十年の間に撮 砂丘の写真を(1枚を残して) い側面に脚光を当てるために 田の活動のあまり知られていな が現れてくる。Chose Commune そのほとんどの被 (植田調と 6

とはなかったのだ。

リーズが制作されたのだ。そし向けに、鳥取砂丘でひとつのシ

て砂丘は植田が最も好む写真の

起因しながらもあまり知られてパの前衛との初めての出会いにさらに1930年代のヨーロッさらに1930年代のヨーロッさらに1930年代のヨーロッとがの前衛との初めての出会いに

植田をあぶりだしている。

を実験への思い入れを鮮明に描と実験への思い入れを鮮明に描めている。当時の写真動向の圏外に自らを置き続けた植田のの・の能力は、常識では計れない。東京から遠く離れた、生まれた地にこだわり続けるという決断地にこだわりに集中することを可能にしたのかもしれない。だからこそ東京から離れていなだからこそ東京から離れていながらも、彼の進化がとどまるこ

Shoji Ueda

1913年、鳥取県生まれ。1932年に上京し、オリエンタル写真学校に入学。卒業後、郷里に帰り 19歳で写真館を開業。この頃より写真雑誌や展覧会に次々と入選し、頭角を現していく。1937年に中国写真家集団創立同人となり、以後、同集団東京展に精力的に作品を発表し、〈少女四態〉などの群像演出写真で注目を浴びる。1949年に「綴方・私の家族」を発表。このシリーズをはじめ、砂浜や砂丘を舞台とした作品で高い評価を得る。